

# 日本人の言葉は 乱暴になつてきたか

心ない言葉が人を傷つけるということは、今に始まったことではない。言葉は人を慰めもするし、どん底に突き落とすこともある。どこの世界でも、いつの時代も。しかし、現在の状況は、どうもこれまでと違う気がする、と感じる人も少なくないようだ（それがこの特集が組まれた理由のはず）。

日本人の言葉づかいが乱暴になつてきた面はたしかにあるかもしれない。最近の小学生が人を罵倒するときの決まり文句は「死ね」「キモい」「ウザい」などだという。しかしながら、これをたんに「言葉が粗雑で乱暴になつた」とだけ見ると、この本質を見誤ってしまう。大人も子どもも言葉づかいが乱暴になり、とくに電子メールやインターネット上の書き込みなど、非対面的なコミュニケーション

いのうえ いっぺい  
井上 逸兵衛  
慶応義塾大学教授

では、相手の受け止め方を斟酌しない過激なもの言いがされている。しかしその一方で、過度に丁寧な言葉づかい（「くさせていただく」の乱用、いわゆる過剰敬語など）や、ぼかし言葉の氾濫（「くみたいな」「アタシ的には」など）も世の話題になつたりする。丁寧すぎる言葉づかいもぼかし表現も相手に直接的に関わらないように距離を置いた言葉づかいである。つまり、一方では乱暴にズケズケと相手を傷つけ、その一方ではよそよそしく距離を置くという両極化が起つていっていることになる。本稿では、このような現象が広く一般的にあるとするならば、その背後にあるであろうことを、とくにコミュニケーションのテクノロジーの変化との関連で考えてみたい。

## 両極化する言葉づかひの背後にあるもの

過度に丁寧であることと乱暴な言葉づかひが共存しているとなると、問題として考えられるのは、そのバランスをとるのが難しくなっているということになる。社会言語学の一分野のポライトネス（丁寧さ）理論と呼ばれる議論では、適切な言語使用をするのに、相手との距離、力関係、場面的要素など多くの複合的要因を勘案して言語的方略の直接性・間接性を判断するというモデルが考えられているが、現実のコミュニケーションではさらに複雑に試行錯誤を繰り返し経験を重ねながら適切な判断能力を習得していく。適切な言葉づかひをすることは高度な状況判断能力と自らの言語運用を管理操作する、これまた高度な能力が要求されるのである。もしこれまでの人たちがこれを難なくこなし、現代人がこれに困難を覚えているとすれば、何らかの環境や対人関係観の変化があったと考えるのが妥当だろう。

多くの人が同感すると思うが、以前の子どもたち（たとえば筆者の子どものころ）の言葉づかひが乱暴ではなかったかと言えば、決してそんなことはなかった。ただ、筆者の記憶と印象では、罵倒語にもう少しバリエーションがあ

り、どこかユーモラスなところがあったように思う。「おたんこなす」とか「おまえのかあちゃんデベソ」などのように相手を罵ってはいるが、いささかパフォーマンスタ的なところがあり、「死ぬ」や「キモい」のように冷淡で突き放した罵倒とは違っていた。

注意しておかねばならないことは、言葉が乱暴になったとして、その言葉は仲間以外の者に対して発せられると思われるが、その「仲間」の感覚とそれに至るプロセスが問題だということだ。現代ではインターネット上の書き込みや電子メールなどによる言葉づかひが乱暴で、ときに犯罪や悲劇につながったりすることがニュースになったりする。いうまでもなく、インターネットを介したコミュニケーションの特徴は「非対面」「匿名」である。目の前にいなければ、あるいはこちらが誰だか知らなければ何を言っても平気というわけだ。かつて、電子メールがなかったころ、言いつらいこと（愛の告白、など）を言うのにわざわざ電話で言う、ということがあった（ように思う）。面と向かって言うのと、恥ずかしかったり、気まずかったりするからである。これが今では、「声」という身体性すら介することなく、かつ直接の反応を受け取ることもなく、メッセージの発信が可能となっている。「2ちゃんねる」な

どに見られる過激なもの言いは、基本的にこの非対面性、匿名性に起因するものである。

しかし、先に述べた「乱暴／過度に丁寧」のバランスという観点からさらによく考えてみると、コミュニケーションテクノロジーの変化そのものが影響を与えているように思われる。端的に言えば、コミュニケーションの「個化」「ピンポイント化」が、コミュニケーションのプロセスに不慣れな、あるいはプロセスを飛び越してしまう人たちを生み出している可能性があるということである。

コミュニケーションの「個化」「ピンポイント化」とは、電子コミュニケーションのテクノロジーが生み出した、他を經由せずに直接的に目標だけに短時間で到達することを言う。この現象はパソコンや電子メディアを常用するものによく見られるが、現代の社会全般に当てはまるように思う。

新しいコミュニケーションのテクノロジーはいつの世もコミュニケーションのあり方だけでなく、人々の生活、生き方そのものを大きく変えてきた。文字の発明、活版印刷、電話、ラジオ・テレビ、と幾度となく人類はコミュニケーション革命を経て今日に至っている。そして、現在我々が遭遇している電子コミュニケーション革命は、電子

メディアであるがゆえに、ピンポイントの「個」対「個」のコミュニケーション、空間を超えた即時的なコミュニケーションを可能にし、それが我々の生活に浸透し、我々の生活を変えてきた。

たとえば、最近の大学生たちは待ち合わせの約束が「アバウト」だ。どうせ誰かが遅刻すると思っっているし、だいたい時間に待ち合わせ場所に着いたらメールしあう。状況に応じて会う場所も調整する。もちろんケータイのなせる業である。オジサン、オバサンたちがその昔お世話になった、駅の伝言板の話や学生たちになると、まるで異国の話を聞いているかのような顔をする。ケータイが可能にしたことは、伝言板や他者を介さず、ピンポイントに「個」にたどりつくということだ。ケータイ電話なら、直に（ピンポイントで）話したい人に電話ができる。女の子の家に電話するのに、父親が出ないかとビビったドキドキ感、もう昭和のノスタルジーとともに語られる話に変わった。

新しいコミュニケーションの道具やメディアは、人類の進歩をもたらしたと同時につねに人間の何かを失わせた。文字の誕生は膨大な量の知識を次世代へと継承することを可能にしたが、それによって個々の人間の記憶力は

著しく減退したと言われている。テレビは人々の世界観と娯楽を一変させたが、テレビによって「一億総白痴化」する、と大宅壮一は弁じた。

### プロセスを処理する能力が高めるもの

話が遠回りするようだが、電子コミュニケーション革命のもたらしたものの代表格であるグーグル検索（インターネットを介した検索すべてを称して便宜的にこう呼ぶことにしよう）は非常に便利だが、問題もある。その一つは、何でもピンポイントに調べられすぎることだ。電子辞書も同様に調べる単語だけがすぐに調べられすぎてしまう。もちろん私も電子辞書も使うが、時間と場所が許せば紙の辞書を引く。電子辞書だと調べようとする語の意味しか調べられないが、紙の辞書だとモタモタと調べていると、たくさん「偶然に」いろんな「余計な」ものを見つけたりする。思わぬ発見をして、おもしろくて読みふけり、何を調べていたか忘れてしまったりする。経験的に言うると、実はこれが馬鹿にならない効力を発する。グーグル検索も同様に、検索をうまくかけられればかけられるほど、ピンポイントに（とりあえずの）情報にたどり着いてしまいい、余計なものを見なくて済んでしまう。端的に言えば、

偶然の出会いが少なく、目的に達するプロセスがないか、簡略化されているのだ。

さらに遠回りしているようだが（もう少しで戻ります）、海外で暮らす駐在員およびその家族が一番苦労するコミュニケーションは、パーティでのコミュニケーションであることが多い。たとえば英語で仕事をすることは実は慣れてしまえばそんなにたいへんではない。やることは決まっているし、物やサービスがそもそもあるからである。ところが、とくに知らない人が多くいるパーティでは、そのような人にも自然に話しかけ、適切なトピックを選択し、ある程度以上の時間、会話を維持しなければならぬ。このプロセスはなかなか骨が折れる（が、楽しい）。パーティの会話はピンポイントに目的に向かうという性質のものではなく、このプロセスそのものが重要だからである。

なんでも「ググって」ピンポイントに目標に達する志向性は、現代人の生活のあらゆる面に見られる。筆者の知る最近の若者にこれまでの若者と異なった特徴があるとすれば、その一つは、テレビを見ない、という者がチラホラいることだ。一人暮らしをしている学生でもテレビを持っていない、というのがいる。別に買う金がないわけではない。

ネットで自分の好きなものを選んでYouTubeなどの動画配信サイトで見ればそれで済むということなのだろう。

「無駄な」コマーシャルや見たくないものに時間を費やさないのだ。

現代人は、インターネット使用者もそうでないものも、程度の差こそあれ、プロセスという雑多で余分なものを許容しにくくなっている。「グーグル世代」の特徴とも思われるこの生態は、「グーグル」に象徴されるインターネットが生み出したものなのか、この世代の生態がインターネットの隆盛を生み出したのかはわからない。おそらくその両方であり、相乗効果があるのだろう。

プロセスを踏むということは、多様な総合力を必要とし、かつそれを養う。人間関係を構築し、さまざまな対人的問題に対処するのにピンポイントで目的に達しようとする態度は適さない。不確定な要因や無駄に思われるプロセスは、ピンポイント化を志向する者には排除すべきものとなる。「仲間以外は、みな風景」とは社会学者宮台真司の言葉だが、「風景」に友好的に接するものはいない。「風景」は何も語らないので「非対面」「匿名」と同じである。ときとしてそれは「乱暴」に傾く。あるいは逆に遠い存在として、「過度に丁寧」な振る舞いになる。「キモい」

「ウザい」は意味の上では本来相手を罵倒する言葉ではない。対象を描写するか、もしくはそれに対する自分の感情、感覚を言い放っただけの突き放した表現だ。

私は大学のゼミで定期的には、私も必ず参加するゼミの公行事として飲み会をすることになっている。飲み会を勝手に好んでやる連中は、放っておいても飲んでいるが、学生にはけっこう飲み会を苦手とするのがある。雑多な人たちがいて、(多少)気をつかわなければならぬ先輩、大人もいる状況で、一見、無駄に無目的に時間と空間と飲食を共有するのは、たしかに(酒を好まないものにはとくに)労力を要する。しかし、この一見無駄なプロセスを処理する能力は人間力とコミュニケーション処理能力を高めると信じている。このような能力を私は「飲み会力」と呼んで(ゼミ生の失笑を買って)いる。ただののんべ教員ではないのだ!

もちろん小学生に「飲み会力」は期待できないが、それに類する能力を高めさせるには、雑多で面倒なコミュニケーションの経験を積み重ねていくしかない。「仲間」以外のものにも顔があり、名前があり、感情があることを身をもって知っていくしかない。